

< もっと知りたい薬の話 >

2 漢方のはなしNo 1

以前、映画『陰陽寺(おんみょうじ)』が上映されていましたが、今でも本屋には、たくさんの関連本を見つけられます。そのおかげで陰陽五行説(いんようごぎょうせつ)という言葉も聞くようになりました。まさに漢方の基本理念です。

そこで漢方を知る上で、陰陽五行説についてお話ししたいと思います。



【陰陽学説とは・・・】

世の中に存在するものは、陰(いん)と陽(よう)の二つの要素から成り立ち、さらに陰陽は互いに対立し、かつ影響しあうものとしています。簡単に言えば世の中全てのものは陰と陽に分けることができ、それぞれがお互いに影響しあっているということです。

例えば、

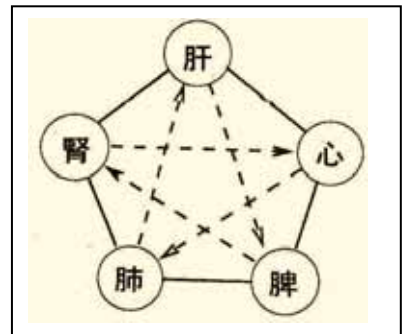
(陰・陽) = (月・太陽)、(夜・朝)、(女・男)、(地・空)など

です。

陰は衰退・静止・寒性・不変などの性質があり、陽は亢進・活動・熱性・変化しやすいなどの性質があります。肉体と精神、生と死、緊張と緩和なども陰陽から成り立つと考えられ、体も体表部・上半身は陽、体内部・下半身は陰としています。

【五行学説とは・・・】

全てのものや現象には木火土金水(もくかどこんすい)と呼ばれる五つ要素が含まれており、お互いに変化し、影響しあい成り立つものとしています。一般に、木を摩擦すると火がおこり(木が火を生じる)、火が燃えつきると灰が生じて土にかえる(火が土を生じる)などの喩えを用いて説明されるので、一方方向の関係だと誤解されやすいですが、実は助け合う関係なのです。実線は相生(そうせい)関係、つまり助け合う関係です。これは母子の関係になぞら



れて説明されます。母は子を産み、母乳を与え、成長を助け、子はその笑みで、母の苦勞を癒す。また、母が病気になると子供の面倒をみられなくなる。逆に子供の夜泣きは、母親を疲れさせる。つまり、お互いに影響しあうのです。点線は相克(そうこく)関係といい抑制しあう関係です。肝は脾を常に抑制しているが、なんらかの原因で脾の働きが落ちた場合、脾は肝の抑制に耐えきれずさらに病状を悪化させることになります。この五つの要素は臓腑のほか色や季節までも分類されており、それぞれが関連しているのです。

(表:五行配当モデル)

五行	臓	腑	主	竅 (きょう)	情	色	季	味
木	肝	胆	筋	目	怒	青	春	酸
火	心	小腸	血	舌	喜	赤	夏	苦
土	脾	胃	肌肉	口	思	黄	土用	甘
金	肺	大腸	皮	鼻	悲	白	秋	辛
水	腎	膀胱	骨	耳	驚	黒	冬	鹹

この表は横のラインで読むと臨床に役立ちます。例えば・・・、

「肝は木のようにのびのびとすることを好む臓器であるが、それができないとイライラがたまってきます。その状態とは、筋肉は強ばり、目はつり上がり、青すじをたてて怒るようになります。春には肝に関連する病気が多く、酸味のある薬物を用いて治療します。」と、このような感じになります。

同じように腎のラインを見てみましょう。

腎の働きが落ちてくると、骨が弱くなり腰痛や骨折などになりやすくなります。また、耳が遠くなり顔色は黒くくすんだようになってきます。冬に病状は悪化し、驚きやすい・おびえやすいなどの精神的症状がでてきます。鹹(かん)(塩からい)味の薬物を用いて治療(他の薬を運搬する働き)します。ただ塩味は多くとりすぎると逆に腎の働きを妨げるので、腎に影響する味であるということを意味しています。

このように見てくると、お年寄りに多く見られる症状だと思えます。従って、一般的にお年寄りには腎虚(腎の働きが落ちた状態)傾向になっていることが分かります。

これらの情報により患者の訴えのみでなく話し方や態度で、その人の持つ病態を把握できるのです。これを望診(ぼうしん)といい、問診、聞診、触診と合わせ四診と呼ばれています。

したがって、冬になると上でも述べたように腎の病気が増えてきます。排尿異常や腰痛に注意してください。また乾燥による肺の陰虚(血虚+津液(しんえき)不足)と胃陰不足による激しい咳込みや口渇には麦門冬湯(ばくもんどうとう)がよく効きます。切れない痰や、から咳が続く顔が真っ赤になるまで咳込んでしまうなど、乾燥傾向の強い老人に多い症状です。これは肺を潤して咳を鎮めるので、冬の風邪にはとてもよい方剤です。

また麦門冬湯は口腔乾燥症の第一選択薬でもあるので、シェーグレン症候群にも用いられます。またACE阻害剤(降圧剤)の副作用である「から咳」にも効くようです。